商学論集　第73巻第1号　　2004年9月

【研究ノート】

未完の悲劇

――『エムペドクレスの死』補論――

神子博昭

悲劇『エムペドクレスの死』は、ついに未完におわった。第一稿と第三稿とをへだてるさけ目は深い亀裂となって、これ以降のヘルダーリンの全作品にあとをとどめることになる。

ふたつの稿の雰囲気のちがいを、きわだたせてみる。

どうしたことか？　奇妙なものだ、まるで
ようやく生きはじめたようだ。すべて変った。
いまはじめてわたしはいる、生きている――ではこのためだった
　か、
つつましく安らかにくらしていたころ、あれほどしばしば
憧れが無為なおまえをおそったのは？
おお、おまえのいのちが軽くなり
のりこえの歓びすべてを
ある全き行為についに見出す、そんな気になったのも、このため
　だったか？
いざ。死のなかへ？　暗闇へは
わずか一歩。しかも見んものと思うのか、わが眼(まなこ)よ！
よく仕えてくれた、おまえの役目は終ったのだ！
いまやしばし夜がわたしの
頭をかげらす。だが喜びあふれるものがある、
気負う胸から炎が湧くのだ。この願いを思うと
総毛だつ！　なんと？　死において、わが
いのちはついに燃えたつ？

第一稿のエムペドクレスは死をまえにして、自然との合一感に酔いしれている。この陶酔が、故郷アグリゲント市の根底的な変革をよびこむ保証にでもなるかのようである。

それにたいし第三稿のエムペドクレスは、こうである。

ところがよく、みなの感謝がわたしを飾り、
いよいよわたしに、わたしだけに
民衆が心をよせだすと、ぞっとしたわたしだった。

というのもひとつの国が死に行くとき、精神は
終りにあたってなおひとりを選び、その口をとおして
白鳥の歌を、最後のいのちをひびかせるものだから。
それはわかっておった。だが喜んで仕えるわたしだった。
事は終った。死すべきものには、もはや
わたしは属しておらぬ。おお、最後の時よ！
おお、精神よ、われらを育み、ひそやかに
照る日にも、かげる日にもしろしめす精神よ、
また、おお、光よ、そして母なる大地よ！
ここにわたしはおります、心は安らかです、と申しますのもわた
しを待つ
新たな時刻はとうにととのえられていたからです。
姿かたちはもはやとらず、いつも
死すべきものらにはそうであるが、短い幸福にあらわれるのでも
ない、わたしが
生き生きしたものを見つけるのは死のなかだ。

ここには合一感による陶酔もなく、故郷のよみがえりを先取りするような高揚感もない。エムペドクレスは、ただ呼びかけにしたがい、行動する。そしてその成り行きは、すべて「精神」と「光」と「母なる大地」にゆだねられている。

作品の成立年代が確定されないのでなんともいえないのだが、両稿のさけ目のもっとも深いところには、賛歌『祭りの日　野良を見ようと』の試みと挫折、そして短詩『生のなかば』の成立があると、わたしは推測している。そしてこのさけ目は、のちにもう一度明確にあとづけられる。それは改稿をへてなったオーデのいくつかの対である。死における合一感におどりいらんばかりの『詩人の勇気』『盲目のうたびと』『囚われの河』。それに向き合う、暗く、きびしい『おずおずと』『キーロン』『ガニュメーデス』。

この小論は、悲劇が未完におわった理由を論じるものではない。むしろこの未完の作品の背景を、みっつの層のもとに素描してみたい。個人的な層、社会的・政治的な層、そして一八、一九世紀のまじわりにおける思想的な層である。そのことをとおして、この悲劇の本来もつ彫りの深さ、ニュアンスの豊かさがいくぶんなりともよみがえれば、と思う。

ひとつの作品には、作品の外にあるさまざまな力や要因がはたらいている。作品の制作は逆にそれらの力や要因に、かたちや関連を与えることによって、はたらきかえそうとする。偶然のように、また奇跡のように、あるいははかったように、ときにそれらの力や要因が焦点を結び、あるいは一定の配置をとる。これが作品が完成したということだが、これらの力や要因などは、つぎの瞬間にはふたたび流動し、位置どりを変え、様相を一変させる。完成は、一瞬のことなのである。作品が未完におわったということは、試みとしてはたしかに失敗ではある。だが失敗は、ときに、あまりに困難であったためついには実現することのなかった夢想の大きさの徴ともなる。『エムペドクレスの死』は、まさにそうした作品である。

*

『エムペドクレスの死』の構想、変更、また未完成の成り行きには、

ズゼッテ・ゴンタルト夫人（ディオティーマ）との恋愛が微妙に影をおとしているように思われる。

劇はヘルダーリンがフランクフルトをはなれ、ホムブルクに移住してから、つまりゴンタルト家の家庭教師の職を辞し、ズゼッテとわかれてから書きはじめられた。もしくは本格的に着手されたと推測されている。ホムブルクはフランクフルト近郊、十キロメートルほど北に位置する。

この小さな町は山のふもとにある。あたりには森があり、すてきな庭園がそこここに散在している。住まいは野に面していて、窓のそとには庭と柏の丘が見える。ほんの数歩で、すぐ美しいヴィースの谷だ。仕事に疲れるとそこにでかけ、丘にのぼり、陽だまりに腰をおろす。そしてフランクフルトの向こうのほう、ずっと遠くをながめやる。こんなたあいないひとときが、生きて働くための勇気と力とをまたわたしに与えてくれるのだ。（一七九九年、二月か三月、妹あて）

ヘルダーリンはフランクフルトの方をながめ、ズゼッテのことを思いやる。また徒歩でフランクフルトにでかけ、ひと月に一度、ときには数か月おいて、ひそかにズゼッテと会い、一言二言ことばをかわし、また手紙を交換した。こうした状態が一年半ほどつづく。ふたりの状況が改善される見込みはまったくなかった。ヘルダーリンがせきとめられたエロスを、いま書きつつある劇へとひそかにそそぎこんだことは十分考えられる。

第一稿はまさにエロスのドラマである。神々の恩寵をうしなったと嘆くエムペドクレスの失意の姿に、ズゼッテとの至福の時を喪失したヘルダーリンを容易にかさねあわすことができる。また回想の場面でエムペドクレスは大地の悩みをともに悩んだというが、ここに純粋なズゼッテ（ディオティーマ）の苦しみをともになったヘルダーリンの無言の共苦を見ることもできる。

ときとしてなにひとつ慰めが見つからないようなことがありますが、それは自分自身の悩みのせいではないのです。むしろすっかりひとりぼっちで、いまの世の中のことを考え、そこに生きるごくまれで善良な方々を思い、その方たちが他のひとより善良ですぐれている、まさにそのせいでどれほど苦しんでいるか、そのことを考えますとどうしようもない悲しみにおそわれるせいなのです。しかもわたしはこのことをくりかえし感じる必要があるのです。というのもこれこそわたしをもっとも清らかな仕事にかりたてるものなのですから。（一七九九年、六月一八日、母あて）

さらにこれは微妙なところであるが、「和解」の場面における市民へのエムペドクレスの呼びかけ、またそれにつづく独白にもヘルダーリン自身の渇望がうかがえるようにおもう。エムペドクレスの燃えあがるいのちという虚構のうちに、ヘルダーリンは自身のエロスをけんめいに昇華させようとしたのであろう。だが虚構の場面にひそかに個人的なエロスの実現をもとめればもとめるほど、ひとたび書く行為からさめたとき、いっそう孤独の深さに身ぶるいせざるをえなかったであろう。「和解」の場面は、ついに空白をのこしたままである。

一七九九年三月ころ、早くもフランクフルト時代のたくわえが底を

三

つきそうな不安におそわれ、彼は母に金を無心する。夏のあいだ画策した雑誌発行の計画も九月ごろには頓挫する。

わたしは自分の活動や生計のためにも、あなたのそばにとどまるためにも、雑誌の計画にたいへんな期待をかけていたのでした。いまその努力も希望も水泡に帰し、おまけにいやな経験もしなければなりませんでした。（一七九九年、九月、ズゼッテあて）

ヘルダーリンは決意をせまられる。しだいにホムブルクを去ることを考えるようになる。ズゼッテへのエロスを断念するほかなくなるのである。

どちらがいいのでしょう、おっしゃってください！　心のうちを黙っていたほうがいいのでしょうか、それともいったほうがいいのでしょうか。…（中略）…わたしのもっともたいせつな愛情すら、あなたへの思いすら断念し、否認したことも少なくありません。そうしてただただあなたのために、この運命をできるかぎり穏やかにたえぬこうとしたのでした。（一七九九年、十月、ズゼッテあて）

会うことはおろか、手紙をわたすことすらきわめて困難な状況のなかで、虚構のなかへとひそかにエロスを昇華させようとして中途で果たせず、さらに生活費の不足、希望をかけていた雑誌計画の挫折がかさなり、しだいにヘルダーリンはおいつめられていった。こうした経過が劇の構想の変更、さらに中断に影をなげかけている。

四

＊

ヘルダーリンがフランクフルト、ホムブルクに滞在していた期間（一七九六―一八〇〇）は、おもにライン河と南ドイツを戦場に、フランスの革命軍とプロシア、オーストリアの反革命軍とがたたかいをくりかえし、フランスがしだいにナショナリズムをむきだしにしはじめ、ドイツ侵略をうかがいだした時期にあたっている。南ドイツの共和主義者たちはフランス軍の助力をあてにして、いく度か領邦国家の解放をこころみたが、そのたびにフランス軍に裏切られ、失敗する。エムペドクレス劇執筆の一七九九年は、そうした試みがいちおう終息した年である。ヘルダーリンの故郷、南ドイツ、シュヴァーベンおよびその近郊における解放のたたかいの経過を、この劇の創作の背景においてみたいのである。

浜本隆志『ドイツ・ジャコバン派』、オットー・ペゲラー『わきから見た政治』の二著を参考に、経過を少したどってみる。

一七九六年、四月から五月にかけて南西ドイツ、とくにシュトゥットガルトを中心に、共和主義者のグループがフランス軍のたすけをかりて共和国を建設するために、行動をはじめた。オーストリア軍とたたかうとき、南ドイツの共和主義者らと手をむすぶことはフランス軍にとっても有益かと思われたが、革命軍の指揮官モロー将軍は彼らを信用せず、むしろバーデンの支配者と通じ、計画は失敗におわる。

一七九八年一月、南ドイツの共和主義者たちはモロー将軍にかわったオージュロー将軍と連絡をとる。農民を組織し、和平会議の開かれる予定のラシュタットの街を占拠、そこから共和国建設のため兵を派遣する計画であった。しかしまたしてもフランス軍の援助なし。

同年三月、スイスはフランス軍の助力のもと、共和国を宣言した。その年から翌一七九九年にかけ南ドイツの共和主義者たちは革命行動のために情宣活動につとめる。当時ヘルダーリンのもっとも近くにいた友人シンクレアも、このうごきに関与していたと推測されている。今度は彼らはスイスからの助力に期待をかけていた。しかしスイスもフランス軍もうごかない。一七九九年三月、オーストリア軍に敗れたフランス軍は、ひとまづ南ドイツから撤退した。

南ドイツの共和主義の運動は、おそらくかぎられた層のものだったろう。そこでフランス軍やスイスをあてにせざるをえなかったわけだが、かりに外からの援助がえられたとしても解放の過程がどれほどすすんだか、こころもとない。

ヘルダーリンは共和主義の運動に共感はしていた。

ライン左岸の住民はもっと元気をだし、地に足をつけて共和主義者になるだろう。とくにマインツでは、どんな自由の芽でも窒息させようとたくらんでいた軍事的専制主義にやがて頸木がはめられることになろう。（一七九八年、二月一二日、弟あて）

だが一方でズゼッテ（ディオティーマ）との恋愛をへることにより、他方でパリにおける革命運動の残虐さと退廃を知って、社会的・政治的な変革のうごきからは一歩、距離をおくことになる。フランス革命にたいするドイツ知識人の反応の一典型であるが、革命、変革への志向を魂の領域に、美的・宗教的領域にふりむけるのである。

わたしは思うのですが、将来、志操や考え方に革命がおこり、これまでのいっさいを恥じいらせることになるでしょう。そのためにドイツは、あるいはたいへんな貢献をなすかもしれないのです。国家は静かに成長すればするほど、それだけ成熟したときはすばらしいものです。ドイツは静かで、つつましい。それでもたくさんの思想が生まれ、たくさんの仕事がなされています。青年たちの心には偉大なうごきがうかがえます。まだそれは他のところほど表だってはいませんが。（一七九七年、一月十日、エーベルあて）

そうしたヘルダーリンであったから故郷シュヴァーベンが政治的に解放されれば、それで事は成ったとは思わなかったろう。また解放闘争の具体的・戦略的な経過に強い関心をよせたとも思われない。ただ魂の変革の行なわれるいわば容器として、外皮として、共和主義的な制度と、なによりも平和を望んでいた。そうした視点から、故郷および近辺での革命運動の成り行きや戦闘に強い関心を抱いていたであろうことは想像される。

またしてもはじまった戦闘は、たぶんヴュルテンベルクもそっとしておいてはくれないでしょう。…（中略）…フランス軍がうまくいったら、ひょっとしてわたしたちの故郷に変化があるかもしれません。（一七九九年、三月、母あて）

祝祭劇『エムペドクレス』が上演されるとしたら、それは解放され、平和のおとずれた故郷がどこよりもふさわしい場処であったろう。その可能性が、フランス軍の南ドイツ撤退、ひきつづいて再開された戦闘によって失われてゆくことになったのである。さらにふみこんで、劇

五

創作の動機と意欲そのものすら、目に見えぬ深部からゆるがされたと想像しても、あながち見当はずれではないと思う。ひきつづく戦乱のなかで政治的な理念からはますますはなれ、ヘルダーリンの関心はむしろ平和そのものにうつって行く。

＊

さいごにこの劇を一八、一九世紀のまじわりにおける思想のうごきという背景のもとにおいてみる。この点についてはバジル・ウィリーの「自然」観念についての研究が示唆的であった（『十八世紀の自然思想』）。

ウィリーは一八世紀のヨーロッパをつらぬく主要観念のひとつである「自然」について、こういっている。

この観念には大まかにいって、ふたつの意味があった。ひとつは「歴史的」な意味であり、そこでは「自然」とは「現にあるものとしての事物、ないしすでになっているものとしての事物」である。もうひとつは「哲学的」な意味であり、「自然」は「なりうるかもしれないものとしての事物」の意味である。

両者の関係は単純ではなく、錯綜し、さまざまな主義主張を生みだしたが、どういう自然観をもつかというとき、つねに問題であるのは、「最善の世界を生みだすためにはどの程度の人間の参与が必要であると想定されるか」ということであった。イギリスの思想に即していえば、バークやワーズワースはこの参与が最小限であることをのぞむ。「自然」はあるがままのものであり、それはまた最善の（もっとも自然な）ものを生みだすのである。それにたいし「革命家」たちは、なりうるかもしれないものを念頭におき、すべての事物を正しいものにつくりあげるために、人間の活動を最大限にのぞむ。そこでは「自然」は、あるべきものとしてあらわれる。

六

ウィリーはもうひとつの区別を書いている。それは「自然」を理性的に把握する場合と、感情的に把握する場合である。「実際、一八世紀におけるこの観念の歴史は、もっとも一般的にいって、理性的原理から感情的原理へのその発展として述べることができるのである」

さてこの「自然」という観念が社会的・政治的にもひとしお切実にヨーロッパの人々の心をとらえたのは、フランス革命という動乱の時期であった。革命は「自然」の名のもとに「なりうるかもしれないものとしての事物」を想定し、「理性」によって現状の根本的変革にのりだした。だが革命の進展につれ、人々には、この騒擾が「約束の地へ通じるより砂漠へ通じているかもしれない」という疑念がわいてきた。そして一度そう確信すると、「あるがままの事物のほうがもたらされるかもしれない事物よりも」かぎりなく好ましくなる。「歴史的で、現実的なもの」という意味の「自然」が、「抽象的で、可能なもの」という意味の「自然」に対置されるようになったのである。そしてこの矛盾は一九世紀にはいっても、ひきつづき意識されるようになったという。

バジル・ウィリーは世紀のうつる時期、「自然」という観念のうちに孕まれている対立と緊張が意識されだしたといっている。この自覚を『エムペドクレスの死』の中断の背景においてみたい。

第一稿のエムペドクレスは死と再生のエロスにかりたてられている。彼は自らの存在も、アグリゲント市民の魂の状態も、根底的に一新しようとはげしく願う。彼がおのれを、またアグリゲント市民の精神をなげいれようとしている「自然」は、当然のことながら理性的に

把握されたものではない。宗教的心情によってとらえられた「自然」である。しかしこの心情は、ヘルダーリンの生きた時代に即していえば、社会的・政治的な変革の道すじをとざされたエネルギーが宗教や思弁の領域に流れこんだものであり、いわば革命的な性格をもつものなのである。つまりこの「自然」は、あるべきものとしての自然なのである。

全一の生命、「純粋ないのち」は自然と人為の両極性をもつ。これまで人為は自然を抑圧し、自己を絶対化し、そのため運命の過程にまきこまれていた。この運命の問題を解決するには、人為が自然をまえにし、おのれの分をわきまえること、おのれを反省することが必要である。エムペドクレスは人為をすて、自然に身を投じるようによびかける。ところがそのエロスはあまりに強烈で、一体化しようとする意志のはげしさは、ついには死の可能性しか人間にのこさぬのではと懸念されるほどである。ここではそもそも、ひとが生きて行けないのである。新たな自然をもとめる人間の存在基盤そのものが、あやういものとなってしまう。

それにたいし老賢者マーネスにこたえる第三稿のエムペドクレスは全き受動性のうちにたっている。ここでは「自然」はウィリーのいう「歴史的で、現実的なもの」としてあらわれているわけでは、まだない。ただ受動性の姿勢が描かれているだけである。エムペドクレスは「現にあるものとしての事物、ないしすでになっているものとしての事物」を肯定的にうけいれているわけでもなく、「〈自然〉（歴史）は最善の（もっとも自然な）ものを生み出」し、さらにはそれは神の救済の意図にかなうと認めているわけでもない。後年ヘルダーリンにもそうした展望がひらけてはくる。しかし、ここでは、まだそうなっていない。だからウィリーの指摘する転位を背景においてみるなら、このエムペドクレスの姿勢は、いままさにここでヨーロッパの自然観が大きくきしんで転換する、その瞬間をとらえたものだといえる。一八世紀から一九世紀へと移り行く思潮の変革の震動が、エムペドクレスの劇の真ん中をつらぬいてはしり、ひとすじの亀裂をのこしていったのである。

しかしこの全き受動性は独自の意味をもつと思われる。それは第一稿のエロスも、『根底』の救済史的な意味も、ともに解体する。自然観に即していえば、それは「なりうるかもしれないものとしての事物」という自然観のもつ性急さも、「現にあるものとしての事物」という自然観のもつ既定性をも、ともに相対化するのである。

（了）

テキスト

Hölderlin. Sämtliche Werke. W. Kohlhammer Verlag. 1943 ff.

参考文献

Otto Pöggeler: Politik aus dem Abseits. In: Homburg vor der Hohe in der deutschen Geistesgeschichte. Klett-Cotta. 1981

バジル・ウィリー『十八世紀の自然思想』三田博雄・松本啓・森松健介訳　みすず書房　一九七五

浜本隆志『ドイツ・ジャコバン派』平凡社　一九九一

ヤメ／ペゲラー編著『ヘーゲル、ヘルダーリンとその仲間』久保陽一編訳　公論社　昭和六〇年

七